主題　中学１年生の総合的な学習の時間のカリキュラムを子どもと創る
～　変動する社会を乗り越えるキャリア学習の実践　～

熊本市立湖東中学校　教諭　髙木雅子

要　約

自然災害、人工知能の発達、コロナ感染など変動する社会の中で、自分の未来を切り拓ひらいていくために、変化に対応していく力と態度を育てる必要がある。中学１年生でどの学校でも行われる職業調べや職業講話が、子どもの側からの課題意識を明確に据えたとき、実感を伴ったキャリア学習となる。そのためには子どもの側の課題意識を育むプロセスを明らかにし、子どもの課題意識を教師のカリキュラムに統合するとともに、防災・減災の視点を持たせるという三つを実践することで、変動する社会を生き抜く力となる総合的な学習の時間のカリキュラムを創ることができる。

＜キーワード＞　子どもの課題意識　変動する社会　プロセス　防災・減災　キャリア学習

１　主題設定の理由

退職の年を迎えた。３８年間を振り返って私の師は子どもたちであったと強く思う。なかでも大学院で「子どもの側からのカリキュラム」（田中 2001）という概念に出会い、さらにその思いは強くなった。教師には生徒に学ばせたい、身に付けたい「教師の側」のカリキュラムがある。一方で子どもの中にも学びたい、身に付けたい、目指したい「子どもの側」のカリキュラムがある。その二つをいかに統合し実現していくかが、現職晩年のテーマであった。教科教育でも、学級・学年経営でも。総合的な学習の時間では特にその必要性を強く感じてきた。

昨年、前任校でネットルールについて取り組んだ子どもたちが大学４年となり就活の時期を迎えた。彼らは、子どもが求める課題と教師が与えたい課題を統合させながら３年間取り組んだ子どもたちであった（詳細は髙木 2014 2015）。２０２１年はコロナ禍の中にあり、会社の採用が少なくなるなど就活は困難な状況であった。しかし、私のもとに進路を報告にきた１８人のうち１６人が中学生の頃に描いた職業やそこからつながる職業または更なる研究の場に就こうとしているという。なぜ彼らは、中学生の頃に抱いた夢を持ち続け、さらにこの就職が困難な時に夢を実現化する一歩を踏み出すことができたのか。その源に中学校の時の総合的な学習があったという。7 年後の彼らの姿は、私が求めてきた子どもと創る総合的な学習の時間が、子どもの未来を拓く力になっていることを実感させてくれた。

その一方で、総合的な学習の時間の活動を充実させようとすると、授業時数の不足や部活動などの放課後の活動との関連で子どもが負担を感じる場面も少なくなかったという反省が私にはある。

また、これまでの実践を振り返ってもう一つ反省すべき点があった。それは、キャリア学習と防災・減災学習の乖離であった。１０年前の東日本大震災で、中学生が自らも避難しつつ地域住民を救った「釜石の奇跡」と呼ばれる出来事を知った。以来中学生への防災・減災教育の重要性を痛感し実践してきたが、これらの活動が卒業後につながるのかということについていまだに確信が持てないでいた。熊本地震や熊本豪雨災害の時も、災害の復旧には専門の職業の力が大きいが、避難生活や復興の過程では、さまざまな職種の人々の防災・減災、さらには災害を乗り越えて新しく一歩を踏み出す意識と実践力が重要になる。コロナ禍も含め変動する社会を生き抜く力にこれまでの実践がつながっていたのかという自問である。

そこで、子どもと創る総合的な学習の時間の実践について以下の３つの視点で検証し、子どもが自身の力で未来を切り開く力を育てる総合的な学習の時間のカリキュラムの在り方を考えることにする。

２　実践検証の視点

検証の視点として以下の三点をあげる。

視点１　教師と子どものカリキュラムの統合へのプロセス
視点２　タブレットの活用による情報の共有の効果
視点３　変動する社会を生き抜く力の育成

教師が子どもの課題意識をどのように聞き取り、教師が計画する年間計画に取り入れることができたのか、限られた授業時間を有効活用するのにタブレットが果たした効果、そして中学１年生のキャリア学習の中心活動である職業講話を職業の紹介でなく社会をつくり、生き抜く人々を知る機会としてどのように開催したか。さらに今後どのように展開できるのか可能性についても考えることにする。

３　実践の検証①　視点１　教師と子どものカリキュラムの統合へのプロセス

（１）教師が計画した年間計画

本校では集団宿泊教室が行われないので、表１にあるように１学期は学校行事にかかわる内容が中心で、2 学期から「夢マップ」づくりや「職業調べ」「進路学習」などキャリア教育に関する取組を計画していた。

表１　年度当初の総合的な学習の時間の年間計画

月	主な内容
４	中学校生活を知る
５	体育大会への参加
６	防災学習
７	夢実現の４ステップを知る
９	夢マップ
１０	職業調べ
１１	進路について考える
１２	コミュニケーション能力向上ワークショップ
１	職業講話
２	合唱コンクール練習
３	卒業・進級への取り組み

６月の防災学習は、熊本地震の際に中学生が避難所で役割を果たしたことや、２０２０年の熊本豪雨災害で湖東中学校の当時の３年生が全校生徒に呼びかけて支援活動を行ったり、受験前に起こった福島地震の際に中学生にエールを送ったりした活動のことを紹介し、中学生は災害時には、被害者であると同時に救援者になりうるという意識を持たせる学習を用意した。（詳細は髙木 2021）

（２）子どもの側からの課題意識の芽生え

７月４日の夜、２人の子どもがロイロノートで似た文章を送ってきた。それは「伊豆で被災された方に私たちに何かできませんか。」といった内容だった。その日に伊豆で起きた大規模な土石流災害の様子がＳＮＳやニュースで何度も報道された。

彼女たちが使った「私たちに何かできませんか」という言葉は、前年の３年生が福島地震の際に当時学年主任だった私に問いかけた言葉だった。前月の防災学習で紹介した先輩たちの活動が心に残っていたのだろう。

私は、子どもの側からの課題意識が芽生え始めたことを感じた。この芽を子どもの側からの課題提案に育てなければならない。早速２人と話をすることにした。

（３）子どもの側からの課題意識を育てるプロセス

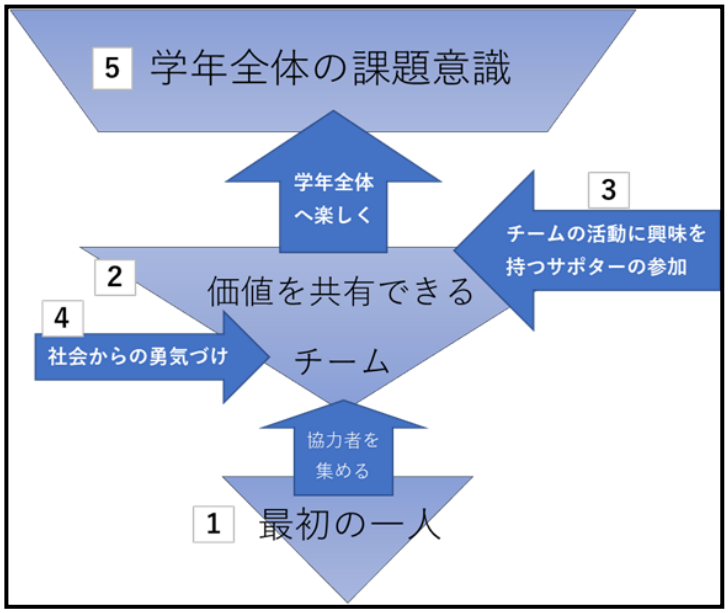

図１　子どもの側からの課題意識を育てるプロセス

子どもは、どんなによい考えを持っていてもすぐに学級や学年全体に声をかけていくのは難しい。まして複数の小学校から集まってきたばかりの時期である。

そこで、**図１**のプロセスによって子どもの側からの課題意識を育む必要がある。まず[2]を作ることを提案した。小学校の頃から気心が知れた彼女たちの提案に共感し、協力してくれる少数のメンバーである。[2]の育ちが子どもの側の課題意識を高める力の核になるし、学年のモデルになる（[2]への手立てと実際については次項で詳述する）。[2]が楽しく活動すると興味を持つ子ども[3]が出てくる。この[3]の子たちにもいろんなことを手伝ってもらう。手伝うことでさらに興味を持ち応援したくなるのだ。さらに、[2]や[3]の活動に価値を添えてくれる学校外の存在がいると子どもたちは社会の中で活動している意識が高まる。それが[4]である。[2]が十分に準備をしたところで、いよいよ集団全体[5]にアピールする。この時大切なのは「楽しさ」や「価値」を伝えることだ。「ねばならない」という義務を押し付けると聞く側は「協力しなければならない」と押し付けられたようで苦しくなり、広がっていかない。本実践では特に[2]の育成について述べる。

（４）価値を共有できるチームが育つと学年が動く

伊豆の土石流災害について何かしたいという子どもが１５人も集まった。部活動がない水曜日の放課後に集合することを決めて、それまでに今年（２０２１年）の伊豆の災害と一年前の同じ日に起きた熊本豪雨災害についてそれぞれに調べてくるように伝えた。

①　災害を自分事として考える

水曜日の放課後。[1]（最初の一人）の子が進行役を務め、伊豆の土石流災害と熊本豪雨災害についての学習会を行った。調べてきた子は６人。その発表内容を聞きながら、「６年生の時、全く関心がなかったんだね。こんなことが起きていたなんて全く知らなかった。」「ということは、何メートルの水が上がってきたの？」「今、人吉や球磨の状態はどうなの？」発表を聞いて疑問が出ると、だれかが調べて新しい情報を伝える。するとまだ人吉球磨は復旧復興の途上にある現状が見えてきた。伊豆の災害も大変だが、自分たちが関わっていくなら熊本豪雨災害の方だという意見が出てきた。話合いは以下のように進んだ。

図２　[2]チームの学習会の様子
事前に調べたことを発表し気づきを交流する

ア　熊本豪雨災害のことを知っての感想や気づきの発表

イ　活動のテーマ・活動目的の決定

ウ　自分たちにできることのアイディアの交換

アの話し合いの時、ある子が「私たちは先輩たちの活動を聞いて、なんかほめられることをやりたいと思っただけなんじゃないかな。本当は被災された方のことなんか何も考えてなかったんじゃないかな。」と発言した。他の子も同様の反応をする。そこで「今年は東日本大震災から１０年というニュースがよくあるよね。なぜこのテーマでニュースが流れるんだろう。」と聞いた。すると「忘れてほしくないから」「関心も持っていてほしいから」という意見がでてきた。そして「被災者の本当の気持ちは私たちにはわからないよ。だけどわかろうとすることが大事なんじゃないの。」と最初につぶやいた子が再度発言した。進行役の子が「わかるわからない、できるできないじゃなくて、わかろう、やってみようって思うことが大事だね。」と発言し、イについて話し合うことにした。

図３　チームの活動テーマを決める

そのテーマが**図３**である。「何かをしてあげよう」ではなく自分たちが人吉球磨の方々に心を寄せていきながらできることをやっていきたいという願いが込められたテーマとなった。さらにチーム名を「人吉復興プロジェクト」と命名した。そして活動目的を「夏休みに一人でも多くの人が人吉に行きたくなる活動をする」とした。ここまでかかった時間は約２時間。５０分の単位時間ではこのような深まりには到達できない。しかし、時にはこんな時間を確保することも大切なことだ。

子どもたちはウについても話したがっていたが時間を考慮して終了とした。アイディアはロイロノートにクラスルームを作って情報交換し、翌日の昼休みに集合することを決めた。

昼休みに集まると、興味を持つ子が出てくる。「何してるの」「絵をかくの手伝おうか？」「調べるのを手伝うよ」できることを少しずつになってくれる[3]が力を貸してくれるようになった。

②　活動を応援する人の存在が社会とつなげる

①で述べた学習会の際に、人吉市役所の復興支援課に電話をした。子どもたちの気持ちを伝え子どもたちにできることのアイディアをいただくためだった。復興支援課の方はとても喜んでくださった。そのお気持ちをスピーカーフォンにして、その場にいた子どもたちは全員が聞いた。１分に満たない会話であったが、子どもたちの活動を待ってくださっている方がいることを実感した。

数日後、チームのメンバーの一人が、家族と人吉に行ってきたと話してくれた。人吉について調べている子どもの様子を見て「お母さんも気になっていたの。」と言って連れて行ってくださったそうだ。人吉では来訪した理由を話すことで、自分の体験を聞かせてくださった方々が何人もいらしたそうだ。真剣な表情で被災状況を語ってくれる様子を見ながら、ネットで得た情報はきっかけであり、実際の体験の持つ力は格段に大きいことを実感した（**図７**）。

他にもかつて人吉・球磨地方に住んでいた方や親せきが被災された方から「関心をもってくれてありがとう。」と声をかけていただいた子もいた。こういった[4]の存在を共有することで活動の有意性を子どもたちはリアルに実感できるのである。

③　復興を進めるさまざまな職業の存在

「夏休みに一人でも多くの人が人吉に行きたくなる」ために、掲示物の作成に取り組んだ。これは、

5の段階に広げるための活動の一つである。学年集会でのプレゼンは学年の子どもたちへ直接呼びかけるものであるが、音声は１回きり。夏休みまで何度も目に触れるように学年の廊下に、チームを４つに分け「災害の状況」「復旧・復興の様子」「人吉観光」（**図４**）「人吉グルメ（通販・テイクアウトも含む）」を紹介した。この活動の中で、災害からの復興のためにさまざまな職業の方々がこれまでの技能を生かしながら復興に取り組んでいることを知り、知ることで2・3の子どもの課題意識は高まっていった。

図４　人吉を PR する掲示物の１枚

（５）子どもの課題意識と教師の年間計画を統合したカリキュラム

人吉プロジェクトメンバーの活動は、私たち教師に重要な観点を与えた。学習指導要領の改訂の経緯に「人工知能が進化し大きく変動する社会であっても、正しく思考し判断するのは人間の力である」とあるが、コロナがもたらした「新しい生活様式」も人工知能の発達や自然災害と同様に社会の変動である。そういった社会変動のなかでも強く生き抜く力をもっと総合的な学習の時間に追究していかなければならないのだ。

そこで、８月に教師自身が現地に赴き知見を広めたうえで当初の計画の９月以降の活動を**表２**のように修正した。修正とは活動内容の変更だけでなく活動の目的や内容をより明確にすることも含んでいる。

修正のポイントは『災害時にそれぞれの職業がどのように貢献できるのか。』を活動の目的や内容に明確化したことである。「災害時」というのは、自然災害だけではなく、不況など仕事が上手くいかない場合もふくむ。そんな場面をどのように乗り越えようとしているかを知ることは、子どもたちの将来に起きるかもしれない困難な（社会が変動する）時を乗り越える力になると考えるからである。

表２　子どもの課題意識と教師の計画を統合したカリキュラム

月	主な内容
４	中学校生活を知る
５	体育大会への参加
６	防災学習
７	夢実現への４ステップを知る
８	**教師が知見を広め、カリキュラムを再考するための現地視察（教師のフィールドワーク）**
９	夢マップ **・夢をかなえた自分が中学・高校を振り返るコーナーをつくる。**
１０	職業調べ **・夢マップで描いた職業がどのように防災や減災に関わるかについて調べる**
１１	進路について考える **防災・減災職業講話**
１２	コミュニケーション能力向上ワークショップ
１	~~職業講話~~（１１月に移動） **県内の企業がどのように地域に貢献しているかを調査して発表**
２	合唱コンクール練習 **人吉で講話を聴く企業や施設について事前学習**
３	卒業・進級への取り組み

	人吉を実地見学し、直接講話を聞く クラスごとに聞いてきた内容をほかの学級に紹介・交流

＊ゴシックは修正した箇所　　＊［　　］の部分については後述する

４　実践の検証②　視点２　タブレット活用による情報の共有の効果

調べ学習にはタブレットが有効であることは述べるまでもない。そこで本章では、情報の共有による共通理解と時短と活動の質の向上の面から述べる。主に活用したのはロイロノートである。特に効果的だった人吉復興プロジェクトの実践で述べることにする。

人吉復興プロジェクトチームの主な活動期間は、７月上旬から終業式までの２週間強だった。その間に、学年に向けて啓発する掲示物の制作や学年集会での発表を行った。復興プロジェクトメンバーだけの活動のため、総合的な学習の時間を使うことはできない。活動時間は主に昼休みだった。昼休みは、子どもは意外に忙しい。そこで、タイムラインを活用することで集まらなくても（ほかの用事で話し合いに参加できなくても）、チームの活動の進行状況を全員が把握することができ（**図５**）、提出箱にそれぞれの資料を共有する（**図６**）ことで他の人が準備している内容と自分が担当する内容が被らないように調節する判断材料を手に入れることができ、活動内容がブラッシュアップされ、調整の時間が短縮されることになった。

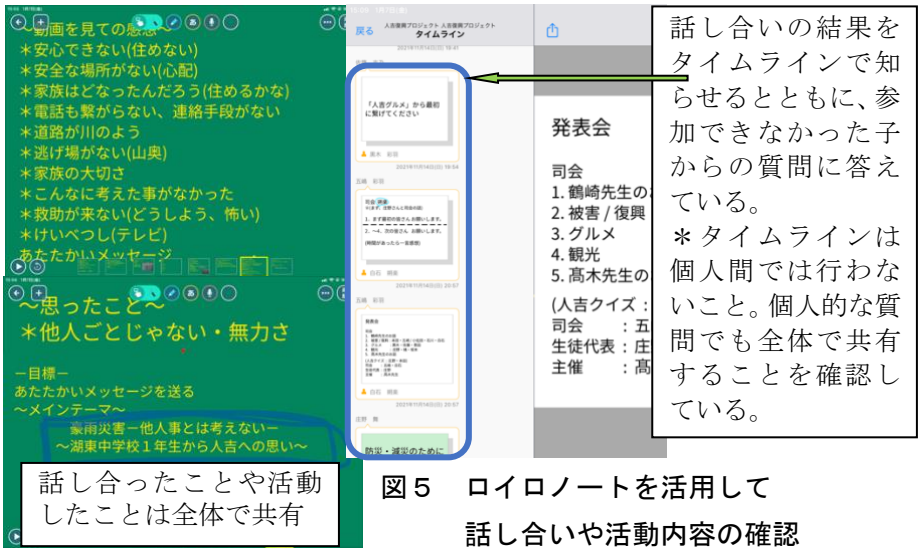

図５　ロイロノートを活用して話し合いや活動内容の確認

図６　発表内容の共有

図７　人吉探訪レポート

前章の３（４）で述べた、家族と人吉を訪ねた子は人吉探訪レポートをタイムラインにアップした（**図７**）。彼の楽しくて心のこもったレポートは他のメンバーのモチベーションを上げるとともに、彼を支持する友だちからのメッセージが彼の積極性を高める効果ももたらした。

５　実践の検証③　変動する社会を生きぬく力の育成

（１）「夢マップ」に過去を振り返るインタビューコーナーを加える

「夢マップ」とは、今（中学１年生）から夢をかなえるまでの道筋を写真や絵などで地図のようにまとめる活動である。「夢」とは職業に限定せず、やりたいことや生き方など広く捉えてよい。夢マップで大切にしたことは、「○○になる」ではなく「どんな○○になる」を意識することだった。また、今回はその一部に、「夢をかなえた自分が、インタビューに答える」コーナーを設けた。

夢をかなえるために準備してきたこと、予想される困難に対する心構えなどを考える機会となり、夢

への実現が難しい状況になった時の生き方につながると考えるからである。

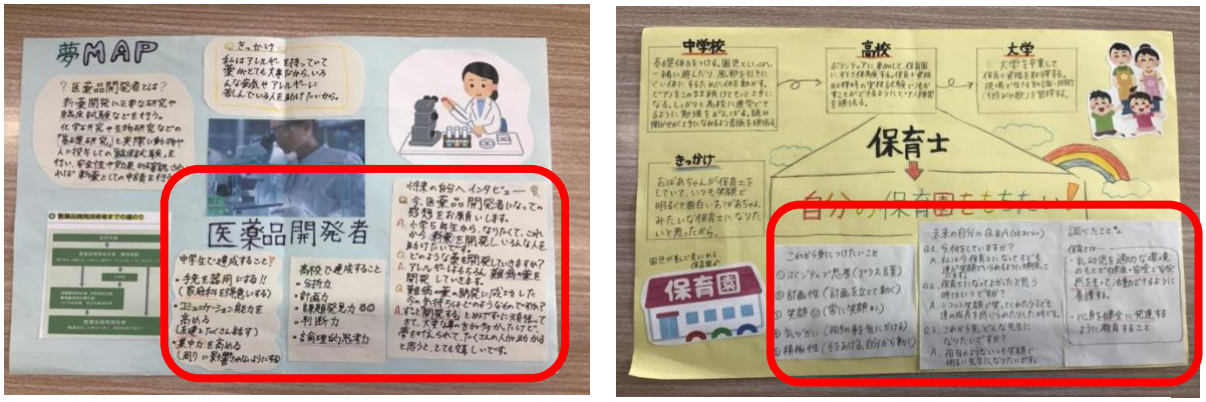

図８　「夢マップ」にインタビューコーナーを入れて夢への取組を具体的にイメージする

（２）「職業調べ」に「仕事と防災と減災について調べる」という項目を入れる

①　職業調べに「防災・減災」の項目を入れる意図

これまでの「職業調べ」は、仕事の内容や苦労、やりがいについてまとめたり、身近な人にインタビューをしたりしてまとめることが多かった。今回は、「仕事と防災・減災について調べよう」という項目を加えた。「災害」への対応という視点を入れることで、変動していく社会への対応力や、職業が社会にもたらす力に気づくことを目的としている。

最初は戸惑う子もいたが、やがて様々な発想で調べはじめた。

②　子どもの発表の例

ア　職業の中で災害時に備えて準備している例

・保育園を作りたいと考えている子が、保育園児に避難訓練をする際に「ダンゴムシ」のポーズなど子どものわかる言葉で教えていることを紹介。

・消防士に興味がある子が、地域活動として「消防団」活動があることを紹介。

・製薬会社に興味がある子が、ワクチン開発は将来の災害（感染症）への準備として紹介。

イ　職業スキルによって災害からの復興・復旧を支援した例

・漫画かアニメの制作会社に興味を持つ子が、尾田栄一郎（ワンピースの作者）さんが県と協力して熊本の各地にキャラクターの銅像を建設していることを紹介。

・医療関係の仕事に就きたい子が、DMAT について紹介。

・ユーチューバーに興味がある子が、食品会社が自社商品を使って災害時に豊かな食事を提供するレシピを公開していることを紹介。

・建築に興味がある子が、建築家板茂さんが考案した段ボールベットの紹介。

ウ　災害や事故から職業にかかわる人の防災意識やスキルを高めることの必要性を調べた例

・電車の運転士になりたい子が、京王線刺傷事件での電車運転士の対応について考察。

・保育士になりたい子が東日本大震災の時の幼稚園バスが津波に巻き込まれた事件について考察。

調べたことを発表し合うことで自分がなりたい職業が、思わぬ形で防災や減災、復興に貢献していることを知り、社会参画の観点からも職業について考えを深めるようになった。

（３）「防災・減災職業講話」の実践

①　防災・減災職業講話の開催

「職業調べ」を踏まえて、パネルディスカッションによる職業講話を開催した。職業講話の講師の情報は以下のとおりである。

＊コーディネーター
　フリーのアナウンサーでありながら防災活動に深くかかわっている方
＊パネリスト
・保育園の事務長で NPO でボランティア団体の調整をされている方
・フリーの助産師で、熊本地震の時に出産の支援や出産後の母子の暮らしの支援をおこなった方
・動物愛護センターの職員で熊本地震の時のペットの保護を行い、今は一緒に避難する啓発活動を行っている方。
・市の危機管理防災総室で勤務しながら気象予報士として NPO 活動も行っている方

開催にあたっては、コーディネーターと打ち合わせをして
まず、コーディネーターから「何のために働くのか」という問いを発し子どもたちに考えを持たせる。続いてパネリストの講話に入る。講話の内容は
１回目　一般的に職業の内容を話してもらう。（各１０分）
２回目目　熊本地震の時にどんなことをしたか、災害時にどんなことを考えたかを話してもらう。
最後に、再び「何のために働くのか」について考える。
という進行にした。職業講話のねらいをパネリストにも了承してもらうために個別の打ち合わせも丁寧に行った。

②　チーム以外の子どもから実行委員を選出

実行委員は**図１**の1（2）の存在を新たに育てる機会である。これまでの取組で、助産師や保育師、動物に興味を持っていた子、公務員の仕事に興味を持っていた子などを踏まえて担任に推薦してもらって実行委員を選出した。講師の紹介は、子どもたちが講師に直接電話でインタビューをして紹介の原稿を書くようにした。インタビューは4の存在を実感する機会になるからだ。これまで中心で活動してきた、人吉プロジェクトのメンバーは、会場設営やお礼状の制作などのサポート役を担ってもらった。今度は彼らが3になり、1（2）の活動を支援するのだ。学年集団5の中に、かつての1 2 3が存在し、より課題意識の高い集団へと成長していくことになる。

③　子どもの感想から

「職業調べ」は主にネット情報であったが、実際に５人の方に出会うことで、自分の課題と繋げながら考えを深めていく姿勢がより強くみられるようになった。以下、子どもの感想を紹介する。

ア　まだ将来の夢がしっかりとは持てていない子

私は最初仕事というものは自分や自分の家族が生活するために必要なお金を得るためにしているものだと考えていました。（中略）でも職業講話をしてから考えが変わりました。特にコーディネーターの水野さんが設けてくれた「なんのために仕事をするのか」という２回目（職業講話の最初と最後：筆者注）目のシンキングタイムで変わりました。もちろんお金のためもあるけれど、他の人の「当たり前」を守るためにする活動という印象に変わりました。（下線は筆者による。以下同じ）（後略）

イ　フィジカルトレーナーになりたいと考えている子

職業講話では、アナウンサーや保育士などの仕事も防災や減災に関わっていることを知りました。そして、皆の「普通のくらし」を守るためにつながっていると思いました。僕の夢はフィジカルトレーナーです。僕はスポーツが好きな人のためにフィジカルトレーナーの仕事はあると思っていましたが、健康な体があれば災害が起きた時も逃げたり人を助けたりすることができると気づきました。（後略）

５　実践の成果と今後の展望

（１）量的変容

図９は、担任クラスの総合的な学習の時間に対するアンケートの結果である。

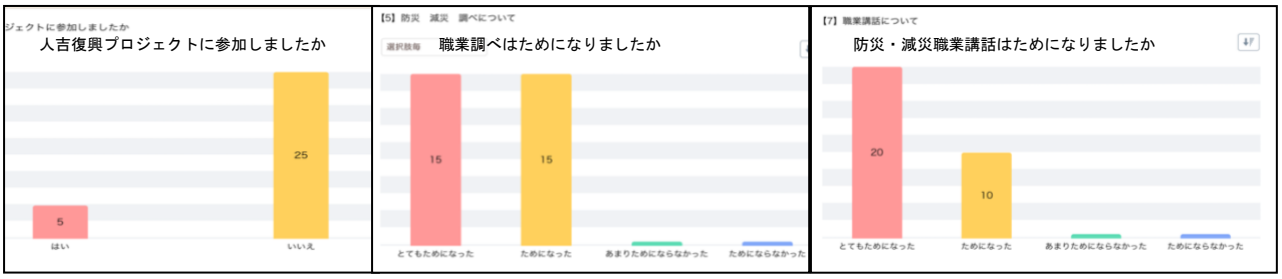

図９　総合的な学習の時間のキャリア教育（職業調べ・職業講話）について

本クラスで人吉復興プロジェクトに参加した生徒は５人と回答しているが、**図１**の2にあたる当初から活動していた生徒は２人であり、途中から参加した3にあたる生徒が３人だった。しかし、「職業調べ」や、「職業講話」を通して全員がためになったと回答し、活動を重ねるごとに「とてもためになった」と感じる生徒が増えていることがわる。

では、具体的にどのような変容が個人の中で起きたのか個別の変容を次項で述べる。

（２）質的変容

「職業調べ」の資料と「夢マップ」から「職業講話」までの振り返りの文章をもとに個別の変容について考察する。

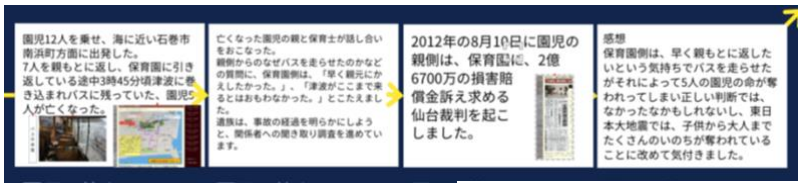

図１０　さきの職業調べ

①　「さき」（仮名）の変容

さきは夢マップに「子ども　を可愛がる明るい保育士になりたい」と書いた。「職業調べ」（**図１０**）で東日本大震災の時に起きた幼稚園バスが津波に飲み込まれた事件とそれが裁判で争われていることを調べた。痛ましい事故について調べたさきが保育士への夢をあきらめはしないかと心配した。しかし、職業講話後の振り返りシートに以下のように書いていた。

≪さきの振り返りより≫

（前略）職業調べでは幼稚園バスが津波に巻き込まれ５人の幼児が犠牲になったことについて調べました。保育園側は早く親元に返すためにバスを走らせたけど、それが原因で５人の幼児が犠牲になりました。職業講話で（中略）は、保育園の施設の安全を確認してから保護者が一日も早く仕事ができるように子どもたちを受け入れたことを聞き、私もしっかりと考えて子どもを守れる保育士になりたいと思いました。

さきが、「職業調べ」で、災害に対して知っておくことの大切さ、安全確認の大切さを踏まえたうえで保育士の仕事は、子どもが可愛いがるだけでなく子どもを育てる親たちが安心して仕事ができる支えになっていることを認識していることがわかる。正しく怖れ、準備する姿勢が生まれているのだ。

②　ひとみの変容

ひとみは、アニメ監督になりたいと考え、「職業調べ」では尾田栄一郎のワンピースの銅像について調べアニメや絵には人を癒す力があると発表していた。しかし、ひとみは職業講話に参加して少し考えが変わってきたこと書いた。

≪ひとみの振り返りより≫

（前略）助産師という仕事なのに生まれようとする赤ちゃんのことだけでなく、赤ちゃんの家族の未来まで守ってあげようと行動していたことに心を打たれました。誰かのために行動できるということは何かしらの職業に就いてからできるすごいことだと思いました。だけど、これは社会人だけに限ったことでは絶対にないとも思いました。中学生になってから、委員会や係・班長などの責任のある仕事をするようになって、自分以外の人のために行動できる人としての土台ができあがっていくんだと気づきました。人吉復興プロジェクト、夢マップ、防災・減災の授業をやってよかったです。

ひとみの学びはまさに「キャリア」（「生涯の中で様々な役割を果たす過程で，自らの役割の価値や自分と役割」との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」中央教育審議会答申 H23）を自ら育もうとしている姿である。大切なのは「社会の中で自分の役割を果たしながら，自分らしい生き方を実現していく過程」（同上）である。そういう意味で、夢や職業は求め続ける過程でいくらでも変えていけるのだ。

（３）今後の展望

３学期には人吉市役所復興支援課・人吉温泉観光協会の協力を得て、人吉を訪ね、現地で実際に被災し復興に取り組んでいる方々から直接お話を伺う機会を計画中である（表２参照）。年度当初になかった活動を入れるために、管理職や保護者の理解と協力が大きかった。しかし、子どもの課題意識を形にしていくことこそが、変動する社会を生き抜く子どもを育む原動力になるのだ。

青井阿蘇神社　宮司
被災したホテルの女将
焼酎の酒蔵の社長
渡し舟の社長　　など
図１１　人吉防災講話講師の例

そして、もう一つ、**表２**に記した「教師のフィールドワーク」（夏休みに実施）教師の学びも重要である。教師が学ぶことで、子どもの発する課題意識の中の価値が受け取れるようになる。そして何より教師の中に生まれる「熱」が新しいアイディアを生みだすのだ。本実践の防災・減災職業講話や人吉実地見学（３学期に予定）などもそこから生まれた。とはいえ本論文は実践途上の提案となった。ともに活動した若い後輩が本実践を批評し、進化させていってくれることを願う。

６　付記（呼称について）

本論文では、１章から４章の実践を述べる章では、生徒を「子ども」と表記した。「学校」という枠組みの中ではなく「社会」で生きていく子どもたちの姿として考えたからである。

７　引用文献・参考文献

１）田中統治『教育研究とカリキュラム研究― 教育意図と学習経験の乖離を中心に― 』（『現代カリキュラム研究』学文社 pp21-33）2001

２）NHK スペシャル取材班『釜石の奇跡　どんな防災教育がいのちを救えるのか？』（イーストプレス 2015）

３）髙木雅子『自ら社会と繋がる学習者の育成～探求する力を育てる総合的な学習の時間のカリキュラムの構想～』2014

４）髙木雅子『子どもと生きるネット社会の土壌づくり～ネットルール「江南ルール」の取組を通して～』2015

５）髙木雅子『社会を創る楽しさを実感する学年活動の在り方～子どもの「つぶやき」を核にして～』2021（日本教育公務員弘済会熊本支部）